

横浜国際港都建設審議会部会

第5回 第1部会（少子高齢化関連）

平成17年11月14日（月）

《出席委員》福田幸男委員（部会長）、小川智也委員、奥山千鶴子委員、
齋藤史郎委員、高梨晃嘉委員、千葉信行委員、寺澤松道委員、
藤井紀代子委員、山田陸子委員、和田卓生委員
＜欠席＞ 今井三男委員、小玉亮子委員、樋口美雄委員

議事

【部会長】 それでは第5回第1部会を開催いたします。第1部会は本日が最終ということもあり、ぜひ皆さんの活発なご審議をいただければと思います。

まず、事務局から資料説明をお願いします。

事務局から資料説明

【部会長】 ありがとうございました。

本日の審議は、「第2回起草委員会とりまとめ」について、第1部会としての意見を出すということであり、部会としての最終的な意見集約ということになります。

お手元の「第2回起草委員会とりまとめ」の、「横浜の将来像」、「めざすべき都市像」、「実現の方向性」は、これまでの各部会の審議を踏まえてまとめ上げたものであり、この内容について、皆さんからご意見を伺いたいと思っております。まずは、第1部会で審議してきた内容を中心に、この部分は再度検討すべきであるとか、表現やキーワードについて、こういう表現のほうがいいのではないかということがあればぜひご発言いただきたいと思っております。

それから、「横浜の将来像」のメインキャッチフレーズは、これからつくっていかねばいけないこともあり、その内容についてのご意見もいただければと思っております。

最後に、「めざすべき都市像」の並び順をどうするかということです。実は第2回起草委員会でも話題になりましたが、並び順はかなり重要ではないかということで、どのような順番にすべきかについて部会でもご意見をいただきたいと思います。「めざすべき都市像」の並び順が決まると、それに合わせて、関連する「実現の方向性」の順序も決まってくることになりますので、本日は「都市像」のみの順番についてご意見をいただければと思います。

それでは、早速ですが、「第2回起草委員会とりまとめ」全体を通してご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

【委員】 1つ確認したいのですが、これはゴシック文字と明朝文字の両方がありますが、これは答申についてもこのままの表現になるのでしょうか。

【部会長】 活字ですね。

【委員】 はい。ゴシックのところが強調されていますが、強調するのであれば、高齢者の視点が表現されている部分はゴシックにすべきだと思います。やはり高齢化社会ですので、そこはしっかりと打ち出しておくべきではないかと思います。

次に、男女共同参画社会の文言がないですね。それでいいのかなという感じがします。

【事務局】 本文にゴシックで強調しているところがございますが、答申の段階でも同じくゴシックを使うかどうかは決まっておられません。このとりまとめは、本日を含め各部会において内容に関する審議を行うこととなっておりますので、審議にあたり内容を簡単にイメージできるように、表現の一部を強調しているものでございます。答申の段階でもこのような表現を使うことは可能ではございますが、ただ、最終的に長期ビジョンとして、議案の形で市会へ提出させていただくものについては基本的にこのような強調などの表現は使用いたしません。

また、男女共同参画社会という単語そのものは、今は使っておりません。内容として盛り込んでおりますのは、4ページの都市像Ⅳのところ、「年齢や性別による固定的な役割分担意識が薄れる」という表現であるとか、個別に「実現の方向性」の4番のところに入っております、「年齢や性別などにとらわれずに」といった文章の表現で、男女共同参画の視点をうたっております。このように、内容を説明する表現で盛り込む場合と、単語として「男女共同参画社会を目指す」といった直接的な表現を使うかどうかということは、ご審議をいただければと考えております。

【部会長】 いかがでしょうか。

【委員】 私は、男女共同参画の言葉が入るに超したことはないとは思いますが、文章の内容からその視点がわかるようになっていけばよいと思います。

【部会長】 そのほかに、他の部会に関連する内容についてでもかまいません。

【委員】 まず、全体としてですが、いろいろなところに入っている「人材」という言葉が気になっております。普通にってしまう言葉なのですが、何か人が物になってしまうような気がしますので、ほかの表現に変えられないでしょうか。「人」や「人々」という

言葉はどうでしょうか。全体の構成イメージの中にもたくさん「人材」という言葉がありますが、表現としてあまり気にしなくても済みそうではあるのですが、やはり1人1人が大事にされるということであれば、人を物として扱うような言葉にとらえられがちな表現は避けるべきではないかと思います。

それから、2ページの「横浜らしさ」というところで、これからの横浜の骨格になってくるところである「横浜らしさ」とは何だろうとずっと皆さんで話し合ってきたと思うのですが、ここを読むと、やはり、異国情緒であるとか、いろいろなものを受け入れてきたという国際性につながるようなことがメインで書いてあるような気がします。例えば、「先取の気風」というところでは「多様な文化を積極的に受け入れてきた」というところですが、それだけではなくて、いろいろな人々も受け入れてきた。外国籍の方もいれば、地方の方も、3日あればハマッ子と呼んでいいというような、このように「文化」だけではなくて、多様な「人」を受け入れてきたという表現も盛り込んではどうでしょうか。また、世界に向けてだけではなく、国内の他都市にも目を向けて、横浜は他の都市とは違う、いろいろな人を受け入れてきた都市なのだということがわかるような「らしさ」が、もう少し表現できるのではないかと思います。

5ページの、「子どもを温かく見守りのびのびと育てよう」の下から5行目に「オープンスペース」という言葉があるのですが、これは広場なのか囲まれた土地なのかがよくわからないところがあり、家の外でも中でもいいのだらうと思うのですが、イメージが漠然としていますので、「居場所」という表現にしてはどうかと思います。

それと、そのすぐ下に「地域の大人と子どもが交流できるネットワーク」と書いてありますが、これも非常に漠然としていてわかりにくく感じます。第2部会のご意見に、青少年の位置づけが明確ではないというものがありました。私は青少年の社会参画のような視点がここに入るとよいのではないかと思います。私はこの週末に金沢に行っていたのですが、金沢においても、中学校、高校、大学はなかなか地域に参画しにくいですし、そのシステムもないと言われているくらいですから、横浜ではさらに難しいのではないかと思います。青少年期から地域や社会に参画できる仕組み、全体として彼らの意思も市政に反映できるとか、地域づくりに反映できるという仕組みをつくれるといいなと思います。ですから、「ネットワーク」ではなくて、しっかりと「青少年の社会参画」とうたったほうがよいのではないかと思います。

次に、7ページに「平等」という言葉が出てきますが、これは第1部会において「機会

の平等」という議論もありましたが、この「平等」という言葉の使い方がこれでよいのかどうかということを、また議論したほうがよいのではないかと思います。

それから、8ページの「便利で快適な暮らし」。また、4ページの都市像Ⅲの3行目に「グローバル化や高齢化が進むなかでも、訪れるすべての人にとって便利で忘れられないような」という表現がありますが、この「便利」は難しい言葉です。便利でさえあればいいのかという問題もありまして、日本語でどのように言ったらよいかかわからないですけれども、アクセシビリティといいますか、到達しやすさというか、ただ便利というよりも希望することがかなえられるというような、少し「便利」とは違う気がするのですが、そういう表現ができないかと思います。いろいろな意味で移動しやすいであるとか、そういう便利さでないと、ただ単に時間を節約できるということではなく、人と人の顔が見える形での到達しやすさという表現にできるといいなと、漠然とそのように思いました。「便利」という言葉の使い方ということです。

それから、9ページの情報化社会のところですが、舌をかみそうな「ユビキタスネット社会」というものも、20年後はこういう表現が古くなってしまっている可能性もあり、こういう言葉を使うのは難しいのではないかと思います。私自身は、どんなに情報化が進もうと、やはり時間を共有すること、さきほど申し上げた「居場所」もそうなのですが、人と人の顔が見える、どこかでだれかとつながってられる、そういう部分がとても大事だろうと思いますので、この辺の、カタカナ用語をどう使うかということは少し考えたほうがいいかと思います。

【部会長】 ありがとうございます。言葉の問題はいろいろとありまして、起草委員会でも多くの意見が出されました。適切な表現となっているかどうかの他にも、いわゆるカタカナ語というものをどこまで使うのかという問題。それから、起草委員長は「品格のある文章」ということをおっしゃって、実はこれが一番難しいという話になったのですけれども、文章化していくと、そこにある言葉が、ある意味ではひとり歩きをしていくということがありますので、かなり慎重な言い回しが求められてくると思います。いろいろな思いが詰まった文案になってくるのですが、その思いをうまく盛り込めるかどうか、うまく表現できるかどうかということが一番難しいところだと思いますので、今のような形で、是非いろいろとご意見をお出しいただければと思います。

例えば、「人材」という表現は、これは随所に出てくるのですが、こういう言葉はどうなのでしょう。ごく普通に使えるのか、それとも「人」という言葉などで言い換えるべき

なのでしょうか。

【委員】 私はあまり「人材」という言葉は気にせず読んでいたのですが、指摘されると、それはそうだなと思います。なぜそうだなと思ったかという、やはり「人材」という言葉には価値が含まれるわけです。その価値というのは何かというと、社会的な価値を有する者ということなのだろうと思うのです。もちろん「人材」という言葉もいろいろなところで使われていますから、そのまま使うことが適切である文章もあるかもしれませんが、もう少し違う意味合いで使えるものであるならば、違った言葉でもいいのかなと思います。いずれにせよ、「人材」に含まれる価値というのはそのときによって変わりますが、基本的には社会的価値ということなのでしょうから、それはある意味では差別につながるのではないかという発想もあるかもしれませんね。ただ、それにかわる言葉で何かあるかという、すぐには思い浮かばないのですけれども。それが1つ。

あと、今回のとりまとめは、今までにいろいろと出てきた議論をすべて咀嚼して、こういう表現になったということで、今までの議論を踏まえるとこれはこういう意味を持っているのだろうということを想像しながら読んでいるものですから、それほど違和感はないのですが、ただ、1つ違和感を持ったのが、2ページの「横浜らしさ」の2行目の、「ホスピタリティ」で、わざわざその後（もてなしの心）と括弧書きで書かれているのです。ホスピタリティはやはりホスピタリティであって、そこに特別な意味合いをもたらす必要があるのかなと思って最初は読んでいたのです。そうしましたら、4ページ目の都市像Ⅲの下から2行目のところに、「私たちの特徴であるもてなしの心と結びつき」という表現が出てきて、今まで横浜の特徴が「もてなしの心」だと言われたことはないのではないか、横浜らしさを出すという意味合いで「もてなし」ということは、私も50年間生きてきてあまり聞いたことがなかったものですから、少し私の感覚とは違う、何かほかの都市の話をしているような気になりました。

【部会長】 これは、部会では「ウエルカム」という言葉を使ったのだと思うのですが。いろいろなところからいろいろな人が来たときに、温かく迎え入れる、そういう意味だったと思うのです。

【委員】 その意味と「もてなし」というのは言葉的に少し違うのではないかという気がしますね。

【委員】 受け入れられるという感じですね。どんな人でも受け入れるという。

【委員】 それと、もう一点は、この5番目の「新しい公共の確立」ですが、この（1）

新しい公共の創造における、「公共」の定義といった話になるのですけれども、次の段落の「これまで公共を担う主体を、主に行政としてきました」ということはそのとおりだと思うのですが、その後のくだりは1970年以降の話になっているように感じるのです。しかし、「公共=行政」としてきたのは歴史的にはもっと古い話ですので、話の流れとして少し違うのではないかなと思います。また、この文脈では経済成長などという表現がありますが、経済は成長したり後退したりを繰り返すので、途中で「これまでのような経済の成長・拡大が見込まれない」と言っていますが、果たしてこれからもそうなのかということとはわからないですし、「これまでのような」という部分が何を指しているのかということもあるのですが、この部分は、後世に残すということを考えると表現を変えたほうがよろしいのではないかなという感じがしました。

それから、(2) 協働による大都市の運営の中で、2行目に「ガバナンス（共治）」と書いているのですけれども、「共治」という言葉は何を意味しているのかということの説明をおかないと、みんなそれぞれ勝手に想像してしまうのではと思います。「ガバナンス」という言葉を使うのか、「共治」という言葉を使うのか、読んでいるほうが同じ理解に立てればいいのでしょうかけれども、言わんとしていることは大体想像がつくのですが、もう少し説明が必要ではないかなという感じがいたしました。

【部会長】 5番目の「実現のための基本姿勢」のところについては、今日の午前中に開催された第3部会においても審議がなされておりますので、見方や表現の問題も含め、起草委員会で審議しなければいけないと思います。

それから、カタカナ語についてですが、さきほどの「ホスピタリティ」や、「ガバナンス」を含め、部会の意見としていかがでしょうか。できるだけ日本語に置きかえるべきなのか、あるいは、無理に置きかえてしまうと本来持っている言葉のニュアンスを失ってしまうということもありますので、それを活かしたほうがいいのかという場合もあります。そのあたりはいかがでしょうか。

【委員】 私は、今ちょうど論文を書かなければいけないこともあり、このカタカナ文字というものに本当に悩まされております。できましたらなるべく使わないで、的確な日本語を使用すべきだと思います。ユビキタスなども一見よく使われているようなのですが、一般的にはなかなか浸透していないと思います。ガバナンスもそうだと思います。

【委員】 私は意見が異なるのですが、この間、小学校高低学年の英語学習というものを調査に行ったのです。1、2年生に英語の授業をしているのですが、その子どもたちが

反応を示すのは、自分たちが聞いたことのある英語、簡単な言葉ですけれども、グッドとかワン、ツー、スリーとか、どこかで聞いたことがあるような言葉に対して反応を示して、聞いたことがない言葉には反応を示さないのです。私はそれを見ていて、やはり、これからさらに国際化が進む社会においては、我々の日常生活のなかでも、できるだけ外国語、特に英語をより身近に提供していくということが必要なのではないかという印象を持ったのです。英語で表現されているものの中身の理解ができるのであれば、英語で表現したほうがこれからの時代を考えると良いのではないかと思います。できるだけ、とは言っても日本語の意味と違ってしまふといけなないのですけれども、英語としての意味が確立しているものについては英語を使ったほうがいいのではないかという印象を持ちました。ユビキタスというものを日本語で説明するとなると、それにかわる言葉がない。日本語で意味を十分説明できるのであれば、その日本語を使うこともいいことではないかと思いますし、先ほどの意見にありました、ユビキタスという言葉がいつまで使われるのかという別の論点がありますけれども、できれば長期ビジョンという形で20年後を考え、しかも横浜のということであれば、英語のほうが理解しやすく正確に意味をとらえられるものは、英語を使うほうがいいのではないかと私は思っております。

ただし、「IT」と「ICT」が混在しているなど、しっかりと言葉の整理をしたうえで使用するべきだと思います。

【委員】 たまたま昨日、ある私の知り合いが30社ぐらいの証券会社のリストを私に渡して、知っている会社はないかと言われたのですが、そこにある会社名は全部カタカナ文字なのです。時代の移り変わりは我々が想像するよりも相当速いと思います。ですから、今のご意見のとおり、これから20年後を考えると、それが当たり前の社会になっているかと思います。ただ、なるべく日本語に訳していただいて、理解しやすくすることは大事だと思います。例えば、ガバナンスにおける「共治」という言葉は、今まで使われていたかどうか、認知度の問題もあるのですが、そういう意味で「共治」だけではわからないと思うのです。それをもう少し砕いた表現ができればいいのではないかと思います。やはり、世代によっては、外来語はなかなか理解が難しいこともありますし、全部とはいかないとは思いますが、頻繁に出てくる言葉ぐらいはある程度使っていいとしても、一般的でない言葉はなるべくわかりやすい日本語を使うことも大切だと思います。

それから、もう1つ、文章化につれて、前よりもインパクトが薄れてきているような感じを受けます。平面的といいますか。要するに、アクセントがどこにあるのかということ

が非常に薄れてきたような感じがします。

【部会長】 インパクトがないということは、もう少し短い文章で大事なところを的確に表現できるといういいことですね。文章が長いというのは、起草委員会でも指摘があったところです。こんなに文字を使わなくてもいいと。できるだけ短い文章で表現したほうが、今の社会ではインパクトがあるという話になりましたので、この文章もよりコンパクトにする必要があるかもしれないですね。

【委員】 文章そのものは、長いとまず読んでくれないということもありますので、そういう意味ではコンパクトにするのはいいと思うのですが、ただ、前のものから見ると随分平面的になっているので、どう工夫したらいいのかなという感じで受けとめたわけです。

【委員】 私が気になっている点は、3の「めざすべき都市像」の文章が、すべて最後が「誇りある都市となるでしょう」、「拠点となるでしょう」とみんな「でしょう」で終わっているところです。何か他人事のような表現であり、「めざすべき都市像」というのですから、「します」などの表現にするべきだと思います。

また、「ホスピタリティ」については、先ほどのご意見にもありましたとおり、「もてなしの心」としてしまうと、何か食事のサービスを提供するといった、いわゆる接客のようなもてなしという感じがしますので、「ホスピタリティ」だけでいいと私は思います。

それから、「平等」のところですが、これはやはり問題があると思います。平等というのは、均等な機会が与えられるということはよいのですが、結果の平等ではありませんので、例えば、「意欲にこたえ、最大限の能力を発揮できるまち」のような表現にしたほうがいいのではないかと思います。

それから、現在は部会長メモに差し替えられたということですので安心したのですが、差し替え前にあった「私たち事」という言葉は、削除されたということによろしいですね。

【部会長】 はい、なくなりました。

【委員】 全体として議論がどんどんまとまってきて、内容として非常にいいものだと思うのですが、私自身が読んでいて内容がよくわからなかったところとして、まず、「めざすべき都市像」のⅢのところ、「地域の資源を活かす」と書いてあるのですが、これとⅤの環境行動都市との違いについて、それぞれがどういうことをイメージしているのかが、標題のキーワードだけだとあまりよくわからないように感じました。

あと、この「実現の方向性」のところも今までの議論が非常に活かされていると思うの

ですが、1つは(7)の「活力を高めよう」という表現なのですが、こちらは、経済的な視点から企業を誘致してきて、例えば財源の確保であるとか、経済の活性化を図るといようなイメージのものなのではないでしょうか。下の文章を読むと大体そのようなことがメインになっているように見えるのですが、それだけではなくて、精神的な満足や活力も含むのか。例えば人材を輩出するということはこの活力に含まれるのか。この「活力」というキーワードだけですと、そのあたりが少しわかりにくくなっていて、全部を含んでいるということなのかもしれないのですが、これだけではあまり下の内容がイメージしにくい感じがしました。

あと、同じ(10)で「情報交流により新たな可能性を創造していこう」というところの、「可能性」が何を求めているのかということがあまりよくわからなくて、人間関係を深めていくということなのか、ビジネスチャンスのようなことを示しているのかということが私自身はよくわからなかったもので、その辺は、もし整理がされているのであれば教えていただきたいと思います。

【部会長】 その点については、事務局いかがでしょうか。

【事務局】 ご説明させていただきます。

4ページの都市像のⅢの「地域の資源を活かす暮らしやすい快適生活都市」というところですが、この「地域の資源を活かす」というところは、資源というものをどう位置づけるのかということになるかと思うのですが、これはいろいろとございまして、例えば、都心部として商業地を持っているとか、あるいは大部分が住宅地の地域であるとか、それ以外にも交通の便、例えば、駅のすぐ近くの地域であるのか、あるいは駅からある程度離れて、比較的自然が豊かな地域であるのかとか、ある意味地域の特徴を担っているような都市環境やインフラなど、それを資源と言いかえるかどうかは難しいところなのですが、そういった地域の特性を活かした暮らしやすい多様なまちづくりをすすめていこうといった視点が一番強いところとございまして、その地域の特性を活かすためには、特性を形づくっている、そこにある資源を活かしていく必要があるのではないか。そのような論法になっているところですので、これは確かに標題に「資源」という言葉だけしかないと、いわゆる石油資源であるとか、そういった資源のイメージになってしまうところもあるかと思いますので、ここは文言の調整を行いたいと考えております。Ⅲはそのような内容ですので、Ⅴにおける環境や、地域、資源という視点とはそのあたりで異なるということとございまして。

それから、8ページの「横浜ならではの魅力を創造し活力を高めよう」の「活力」というところですが、確かに、ここの(7)では、基本的にはいわゆる経済とか産業の視点で都市の活力を高めるということを語っておりまして、人材という言葉が良いか悪いかは別として、人材育成の視点は別の部分で語っているところがございます。ここはある程度具体的な、ジャンル別の記載を行うところですので、経済、産業といった視点からの都市の活力ということがしっかりとわかる文言調整をしていければと考えております。

次に9ページの(10)の「活発な情報交流により新たな可能性を創造していこう」の「可能性」ですが、当然、情報を活用することによって何か新しいものが生み出されるだろうということは予測しているのですけれども、では、実際どういったものが可能性としてあるのかということ是非常に難しいことであり、私どもも将来、未来を予測できないところがありまして、そのようなことから、単に可能性があるだろうという言葉を使っているところがございます。情報を使って、いろいろな新しい可能性を生み出し、新しい技術を活かしていくということは、現在も様々な分野で行われているところがございます、例えば介護とか、家庭の医療などにもいろいろと使われているところなのですが、これが実際、IT技術、あるいはICT技術がここ数年間で発達したことによって私たちの生活がどう変わったのかということ、ここ2、3年だけをとらえても、かなり劇的な変化を見せておりますので、なかなか先が読みづらいところがあるかと思えます。ですので、20年を展望するなかでは、ある程度具体的に、こういう可能性があるのではないのでしょうかといった表現ではなくて、新たな可能性、分野を創造していきましょうという形の、抑えた表現で整理をさせていただいております。

【委員】 ありがとうございます。

【部会長】 よろしいですか。どうぞ。

【委員】 1つ気になったところで、言葉の問題ですが、5ページの「子どもを温かく見守りのびのびと育てよう」というところの最後の文脈なのですが、「世代間のバランスがとれた地域コミュニティ」という表現が出てきます。言わんとしていることはわかるのですけれども、現実問題としてこの「バランスがとれたコミュニティ」というのは、機能面で言っているのか、あるいは、地域に住んでいる人たちの人口構成で言っているのか。人口構成で言えば、これはなかなか難しいですよ。住宅政策の問題も絡んでくるでしょうし。ですから、何かもう少しわかりやすい表現にしてもよいのではという気がいたしました。

あと、7ページの「ゆとりをもって安心していきいきと暮らそう」というところで、「個人の尊厳が守られ持続可能な福祉・医療制度があり」という表現があるのですが、これはどちらかといえば国の制度的な問題との絡みもありますし、それを目指して横浜の行政がどこまでかわれるのかという制約もあると思いますので、この表現でいいのかなという気がしています。

あと、「実現のための基本姿勢」について、差しかえはいいと思うのですが、前段の「横浜市民の基本姿勢」、それも「一人ひとりの基本姿勢」の中に、「新しい公共のあり方」が位置づけられていない。黒丸の最後の部分に「一人ひとりが公共サービスに対するコスト意識を持ち、社会における公正・公平な給付と負担のあり方」、とありますが、これはこれでわかるのですが、具体的な問題を通じて議論しなければならない問題なので、この部分だけが何か強調されているような気がします。まさに、「限られた公共財の適切な活用と配分」という観点から「新しい公共のあり方」という1つの方法も出てくるでしょうし、そういう意味で、前段の行政が提供する公共サービスのコスト意識ということ、これはこれで必要なことだとは思いますが、あえてここでそれを強調する意味合いがどこにあるのかということがわからないなという気がいたしました。

あと、先ほどもありました「人材」という言葉は、率直に言って、私もかなり抵抗感を持っています。もともと企業なり、組織なりが、自分たちの目的や利益に沿う人をどうするかという意味で、まさに材料的に「人材」という言葉を使ってきたということもありますので、そういう意味で、今の社会全体が競争社会という、マスコミを通じて勝ち組、負け組のような認識が蔓延している中で、「人材」を使ったときの「材」の部分、いいものと悪いものがあるような、そういうイメージとして受け取られかねないということもあり、言葉の問題として再考してもいいかと思います。とはいえ、それに置きかえる言葉として何が適当なのかということは、起草委員会でも考えていただいたほうがいいのかなという気がします。

【部会長】 これはたくさんの方からご意見をいただいたこともありますので、ぜひ、起草委員会でどういう言葉がふさわしいか再度議論したいと思います。それから、先ほど、青少年の視点が弱いのではないかと、これは、第2部会からも少し指摘がありまして、青少年の社会参画ということを取り上げていくなかでは、青少年と地域との垣根をなくしていくような、そういう仕掛けづくりも必要だろうと思っています。これはなかなか難しい問題で、私は青少年問題協議会というところで長く委員をしていたのですが、小

学校まではいろいろな形で大人がかかわるのですが、中学校以降になると、ぱたっとかかわりがなくなるのです。中、高、大学もそうですけれども、その流れは結局大人にまでつながっていくわけですから、そのあたりの仕掛けづくりをしないと、みんなが参画できるような社会というものにはなっていないのではないかと思いますし、その意味では、ここで積極的に取り上げていくというのはとても大事な観点だと思っています。

そのほかに何かございますか。言葉や表現の問題がかなり出ておりますが、部会の議論を超えても結構です。最後の機会ですので遠慮なくご発言いただきたいと思います。それから、全体でのご意見がなくなれば、最終的な骨組みの部分であるメインキャッチフレーズのイメージであるとか、あるいは、都市像の並びの問題に言及されても結構です。

【委員】 「実現のための基本姿勢」の部分にある、いわゆる地方分権の部分ですが、ここの触れ方ですと、国や県からの分権の視点はわかるのですが、横浜市自らの分権、例えば、区政を充実するとか、区長への分権をすすめるなどの視点が盛り込まれていないと思います。地方への分権は、大都市制度を含めて進めていかなければいけないのですが、やはり「身近な問題の解決に向けて自ら決定できる」ということには、具体的に区という表現を使うかどうかは別として、域内分権も含まれる必要があると思います。

【部会長】 そのほか、先ほど「ホスピタリティ」の議論がありましたが、「横浜の将来像」のなかの「横浜らしさ」をどのようにとらえるかという問題もあります。非常に難しいところなのですが、「市民力」のもう一方の柱となる「横浜らしさ」とは何かという問題です。先ほどのご意見では、多様な文化だけではなくて、多様な人を受け入れてきたという、人の視点もそこに含まれるであろうということです。それから、国際性という部分では、世界に向けて開かれているだけではなくて、国内にも開かれている、そのようなニュアンスをぜひ入れてほしいという意見もありましたけれども、この「横浜らしさ」ということに関してはいかがでしょうか。

【委員】 私はここに書いてあるようなことなのだろうと思います。ハード面との関連も出てきますけれども、風土的なものとしてはこういうまちだろうと思います。とにかく新しいものは何でもいいという気風ですので。

【委員】 長期ビジョンにより、市外に住んでいる人に横浜をアピールすることを考えると、横浜の、例えば中華街や、みなとみらいなどのハード面を強調しても、別にそこに住みたいとか、そこがとても魅力のあるまちに感じるとは必ずしもなるわけではなくて、そこに住むと、多様な人がいていろいろな経験ができるとか、自分の能力開発につながる

とか、いろいろな機会が与えられるというように、どういう人が育つのかとか、どういう人がそこにいるのかということをしてできるだけ「横浜らしさ」としてうたったほうが良いのではないかと考えています。そうすると、中華街のイメージの国際性というよりは、やはり地域における文化であるとか、何でも取り入れることでいろいろな活動をしているとか、教育にもそういうものが反映されているとか、そのような開放性をうたうのが一番いいのではないかと思います。

【委員】 根本的な部分ですが、言葉として「横浜らしさ」をなぜ言わなければいけないのかなと思ったのです。「横浜らしさを永遠に」であるとか、そういう表現であればわかるのですが、「横浜らしさ」だけで終わってしまうという、そのようなメインキャッチフレーズは一体何なのだろうという違和感は、最初に読んだときからありました。横浜らしさとはこういうことなのだろうとは思いますが、横浜らしさを強調していくことは、そのとおりだと思うのですが、だからといって横浜らしさという言葉在前面に出せばいいのかなという、もう少し何かさばき方があるのではないかという感じもします。

【委員】 「横浜らしさ」という議論はいつも出てくるのです。なかなか決め手がないのです。確かに、ここにあるように「歴史と異国情緒ある街」だけではなくて、やはり、「三日住めばハマッ子」というような、多様な人や文化を受け入れる視点は含まれると思います。

【部会長】 このまちの持っている魅力や特色を最大限に活かすということなのですね、結果としては。それが1つの推進力になると思うのですけれども、それをどう表現するか、「横浜らしさ」という言葉でいいのかどうかということですね。これも含めて、今度はキャッチフレーズもつくっていかなければいけないのです。これが意外と難しい話でして、みんなが20年後をイメージできるような、将来をその言葉で的確に表現し、みんなが口ずさんでくれるようなキャッチフレーズをつくるというのはとても難しいのです。

【委員】 どのような表現にしていいいかわからないのですけれども、「ホスピタリティ」ではなくて、「三日住めば横浜人」のような、だれでも受け入れるという、そのような意味を持つ良い言葉があれば、すごくいいなと思うのですが。

【部会長】 これは大事なところですよ、横浜を語る言葉として。「ホスピタリティ」の意味をうまく表現できるかどうかですが。

【委員】 それと、「先取の気風」という言葉はあるのですか。「進取の気風」はよく使いますが、「先取の気風」とも言うのですか。

【部会長】 使わないですか。

【委員】 あまり聞きませんね。

【委員】 先取りするという言葉はありますが。

【委員】 進取の気性はあるのですよね。例えば元町であるとか、まさしくあれは進取の気性ですよね。

【部会長】 そうですね。ここは表現を改めましょうか。

【事務局】 はい。

【部会長】 言葉の問題ですが、起草委員会でも議論をしていて、現在は日本語で表記していますが、英語で書き直したらどうなるかということもあるのです。英語にしたときにもわかりやすく、みんなが同じイメージを持てるかどうかということが、これからの1つのポイントになるのではという話もあるのです。その場合は、当然簡潔さと論理性が求められることとなります。

時間も迫ってきました。最後に「めざすべき都市像」の部分ですが、冒頭でも少しご説明しましたとおり、起草委員会においても議論になりましたが、都市像のⅠからⅤまでをどのような順番で並べるかという問題がございます。どこにより重点を置くか、あるいはどういうストーリー性を持たせるかということでもあるのですが、これについてはいかがでしょうか。実は部会によって意見が異なっているのです。

【委員】 基本的には5つの柱が全部並列であるわけですよね。並列がおそらく正しいのでしょけれども、強いて順序を上げるとすると、おそらく都市像のⅠがすべての基本なのではないかと思います。これがあってすべてが始まるという感じがします。あとは、単刀直入に申し上げますと、Ⅳの「活力都市」がやはり重要かと思います。ここがしっかりしていないと都市間競争にも勝てないし、都市としての品格も、横浜らしさも損ないかねないのかなと思います。他は別段どれが比較的重要という感じは特にしません。Ⅳの重要性については、たしか起草委員会でもどなたかがおっしゃっていたと思いますが。

【部会長】 その部分については第3部会長がご発言されています。

【事務局】 起草委員会では、3つの案が出されまして、第1部会長からは都市像のⅠの安全・安心が最初にあることが、市民生活の視点から重要であろうとのご意見をいただいております。第2部会長からは、都市像のⅡの子育てや教育という、人を育てていくということが最初にあり、その次に経済や働き方があるというストーリーをご提案いただいております。第3部会長は、都市像のⅣの経済と働き方を重視すべきとのご意見でござ

いまして、何はともあれ都市に活力がないと、他のものは成り立たない。経済が最初にあり、安全・安心は最後にどっしりと構える形で打ち出したほうがよろしいのではないかとのご意見をいただいております。

ですので、起草委員会では、ⅠかⅡかⅣのいずれかが最初にくるという3案となっております。

【部会長】 というわけで、部会でも、もう一度ご意見を伺いたいという話になったのです。

【委員】 結局、これはどれも大事で、どのようなストーリーにするかで単純に順番が変わるだけだと思いますので、誰かがイニシアチブをとって決めてしまうか、あるいは市民が見たときに、どういう並びが一番わかりやすいかという観点から決めるか、そのどちらかしかないと思います。時間的に可能であれば、例えば、審議会の委員全員や市民にアンケート形式で意見を聞いてみるなどもいいかもしれません。理屈だけでは決まらないと思いますので、決め方を合意して、みんなが納得すればそれでいいのかなというのが私の個人的な感想です。

【委員】 20年後の横浜をどういう都市にしていくかということでこの順番は決まってくると思います。まず、産業についてですが、正直言って横浜は産業的には発展しているという感じではないのですね。やはり住宅都市という側面が非常に強いです。ですから、みなとみらいや、北部方面など、それなりに産業も集積して発展するのでしょうけれども、それでもやはり横浜市民の多くは市外へ働きに行くことになると思われるのです。それはおそらく20年後も変わらないと思います。すると、やはり住宅都市としての側面により重点を置かざるを得ないのではないかという印象を持っています。

その中で、安全都市なのか、それとも人材輩出都市なのかということになるのですけれども、かつての横浜博覧会のテーマの1つは「子ども」で、人を育てることが横浜にとっての1つの魅力として掲げたのですが、そういう意味ではⅡということもあるのかもしれません。しかし私は、最終的にはやはり安全都市に引っ張られています。それは、今の日本や世界の状況が前提にあるのだらうと思いますけれども、安全都市を前面に出したほうが市民的には理解される、安定しているのかなという感じを持っております。もちろん、最終的には多くの市民にご意見を伺って決めることが一番適切なのかもしれませんが。

【委員】 やはり横浜の特色は、東京に隣接しているながら昼間人口も比較的多いというところだと思います。女性もまだまだ専業主婦という形で地域に残っているのだけれども、

やはり、子どもを育てることと働くことを考えたときには、東京と比べても、横浜で子育てしながら、仕事もしたいという女性がすごく多いと思います。その女性の活力をうまく使ったらどうかというご意見も以前ありましたが、生活も充実し、なおかつ仕事も身近でできるということを目指して職住隣接を図る。この視点からであれば、最初は生活面といいですか、安心・安全、暮らしやすいということがあり、次に働き方の仕組みづくり。今のような東京へ行くという働き方ではない仕組みを、横浜型としてつくっていくという、そういう方向を目指していきたいという願があります。これから退職される人も地域に戻ってくる。女性もいる。そのなかで地域も活性化することで、東京とは違うものがつくれるのではないかと。それがイメージできるようなキャッチフレーズや都市像にしたいと思います。言葉では言いにくいのですが、それが東京との差別化であり、地方都市との差別化でもあると思うのです。それをうまく表現できれば良いと思います。

【委員】 私も、一番はやはり安全・安心の都市だと思うのです。これは防災や防犯だけではなくて、私たちが生活していくうえで最低限必要な住みやすい社会をつくるという意味も入っていますので、これが市民生活の基本として最も大事なことではないかと思えます。

それから、2番目は都市像のⅡだと思います。やはり子育てや教育ですね。その次に都市像のⅣです。企業や経済と、多様な働き方を3番目にして、あとは、Ⅲが4番で、Ⅴが5番でいいのではないかと思います。

【部会長】 ありがとうございます。では、このご意見も踏まえて、最終調整は起草委員会にお任せいただければと思います。

それから、キャッチフレーズについても、東京や他都市とも違う、結局「横浜らしさ」に行き着くわけですが、それがうまく表現できるようなものになればと思います。20年後の横浜を表現し、それがみんなのこれからの目標にもなるというような、そういうキャッチフレーズ、これはもう1つのポイントでもあります。

それでは、時間の関係もありまして、そろそろまとめに入りたいと思います。今日の審議を踏まえ、11月28日に第3回の起草委員会を予定しております。そこで答申案を作成し、12月6日の第3回総会でそれを審議し、確定する予定でございます。答申案につきましては、総会の前に委員のみなさまにお送りする予定ではありますが、起草委員会と総会の間はほとんど時間がないので、その間での修正等は難しいというのが現状です。ですので、本日の審議を踏まえ、更なるご意見がありましたら、なるべく28日の起

草委員会の前までにお寄せいただきたいと思います。是非その日程でご協力いただければ
と思っております。

では、最後に事務局から連絡をお願いいたします。

事務局から日程の連絡

【部会長】 本日で第1部会を終了いたしますが、みなさまから他にご発言はございますか。よろしいですか。

それでは、これをもちまして第5回第1部会を終わらせていただきます。いろいろとお忙しいなか、5回の審議にお集まりいただき、また、熱心なご討議に参加いただきまして、ほんとうにありがとうございました。

— 了 —